

「苑」この人に会いたい  
作家  
三田誠広さん(62歳)



# 三田 誠広

「小説とは思考実験。  
一回限りの人生だけど、  
小説を書くことで色んな人生を  
体験できるのが面白いですね」

第77回芥川賞を受賞した『僕って何』、  
中学校の教科書に十数年掲載されている  
『いちご同盟』といった小説のみならず、  
宗教から歴史、児童文学まで幅広いジャンルの本を  
発表して輝き続ける、三田誠広さんに迫った。

# 苑

昭和13年創業以来、石一筋頑固に作り続け、  
これまで1万数千人の方々に「お墓」をお届けし、  
今年の10月を以って72年を迎える株式会社大塚でございます。  
これまでご縁をいただきました皆様方に1年に1回のご挨拶として  
「苑」を発行させていただいてまいりました。  
今年も2010年版として制作、発行させていただくことができました。  
これもひとえに、皆様方にいただきましたご縁の賜物でございます。  
72年間のご愛顧とともに感謝申し上げます。  
今後とも、社員一同努力していく所存でございます。  
なお一層のご支援、ご指導をいただきますよう、  
よろしくお願い申し上げます。  
代表取締役 大塚 崇行

C O N T E N T S  
目次

「苑」この人に会いたい・作家 三田誠広	1
座談会・「大塚」が社員に求める人間像	6
立松和平の墓紀行	10
先祖になる自覚	12
みっつで、ひとつ	14
旅のつれづれ	15
取扱優良霊園のご案内	16



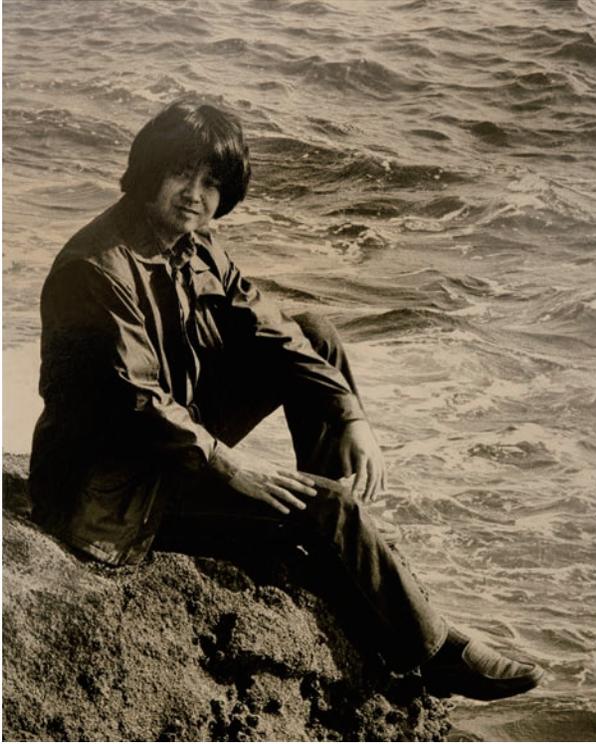
### 文学少年が高校で登校拒否に

「○○って何？」という言い方が流行語にもなった芥川賞受賞作品『僕って何』をはじめ、NHKのドラマや鹿島勤監督により映画化された『いちご同盟』が記憶に残る人も多いことだろう。三田誠広さんは、1948年に大阪市で生まれた。三田コピーの創業者を父に持つ家庭に育ち、女優の三田和代さんは実姉である。

「小学校の頃に宮沢賢治を読んで中学でドフトエフスキーを読んだので、とにかく文学一筋でした。4人きょうだいの末っ子で、親が揃えた全集に加えて本好きの兄貴が万卷の書を持っていましたから、非常にメリットがありましたね。家にドフトエフスキー全集や漱石全集があること自体ラッキーなことですし、買ってまで読んだかわかりませんから、『罪と罰』から読みたい順番に読んで、高校の頃には全部読んでいたと思います。

高校2年の時、受験勉強ばかりの学校が面白くなくなって、今でいうひきこもりになったんですね。一年ぐらい学校に行かずに、仏教とか物理学の本を読んできました。友達がいなかったわけじゃないから、いわば積極的な引きこもりですね（笑）。一年落第して、どうしようかなと思っていた時に、埴谷雄高さんの哲学的な小説に出会ったんです。そこで、小説を書けば自分からメッセージが送れる。ということに気付いて、書いてみた小説

朝日新聞で『龍をみたか』の掲載が始まった30歳の時。この前年に芥川賞を受賞した



が『Mの世界』なんです。『文芸』の学生コンクールに応募したら佳作に選ばれたので編集者とコネができて、埴谷さんのところに連れていってもらったこともありました。それで小説家になろうと。子供の頃からそれしかないという感じで、他の仕事をやるうとはまったく考えなかったです。

妻は高校時代の同級生なんですけど、私がそんな状態の時に励ましてくれたので、そこで救われた部分は大きいですね。彼女がいなかったら引きこもりのままだったかもしれない(笑)。人間にメッセージを出す必要はないという、一人で悟りの境地にいましたから」

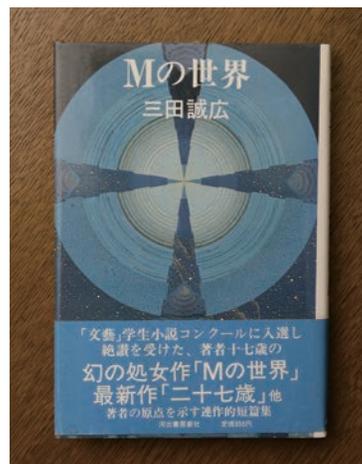
## 大学生生活から編集者、作家へ

1968年、早稲田大学第一文学部に入学。大学へ進学しようと思ったのは、小説を書き始めてからだという。

「当時は学生運動が流行りかけていたもので、それは見ておいた方がいいと思って早稲田へ行こうと思ったんですね。大学で何かを学ぼうとは決して思わなかった。

大学のクラスは面白かったですよ。早稲田の学生は第二学生会館というところを封鎖してたんですけど、クラスでひと部屋もらって毎日友達と党派を超えて話していたんですね。革マル派が体制で第二学生会館は反体制でした。今でも思い出すのは、クラスにいた革マルの人にクラス討論をやるうって呼びかけたら、勇気のある奴がチェーンを巻きながら来たんですよ(笑)。面白かったですね。どの党派にもこれだというものはなくて、ヘルメットはかぶらなかつたです。

大学へ行きながら小説を書いていたんですが、ひとつ『文芸』に載っただけであとはボツでしたね。作家になるまではタイムラグがあって、卒業後は4年ぐらいサラリーマンをやりました。おもちゃ屋さんの業界で1年、ホンダの販売店向けの広報誌を3年です。学生の頃はまったく興味のない世界でしたけど、やってみると面白かったですよ。一生懸命商売



『僕って何』(河出書房新社)  
舞台は全共闘運動が盛んだった60年代末の大学。恋愛小説としても読める青春小説

『Mの世界』(河出書房新社)  
意識、自我、実存といったテーマを素朴に追求した観念小説。処女作でもある重要な作品

をしている人を見ると感動してね。例えば自動車のトップセールスマンに取材すると学ぶこともあるし、やってる時は自分がトップセールスマンになったような気持ちですよ(笑)。昔からいろいろ考えて対処するのが好きでしたね。作家として食べられるようになったのは、29歳で芥川賞をもらってからです」

## 代表作や転機となった作品の数々

『Mの世界』は哲学小説の真似事です。今読み返しても訳がわからない(笑)。一番頭が冴えてた頃なんじゃないかな。



『僕って何』は早稲田での体験がもとになっていて、漱石の『三四郎』が物語の祖形なんです。学生運動については第三者的な目で書いてますね。本来の、世の中を良くしよう、という目的とは違ったところで派閥争いがあるので、そこに巻き込まれてしまう困った状態の人間を『僕って何』で書いてみたくて。

『いちご同盟』の主人公は、今スペインに住んでいる息子がモデルです。息子が小学校6年の時、同じ年の子がマンションから飛び降り自殺をしたニュースを見て彼が『わかる』と言ったんですね。これはまずいと思った。父親としてどうしたら彼を励ますことができるか考えて、そこからはフィクションです。病気で死ぬ女の子の話を織り交ぜて、身近で人が死んだ時に残った者はそれをバネにして生きようという気分になるという、思考実験を設定した上で書いたんですね。女の子が死んだ後、少年二人が『俺たちは生きよう』と言いながら歩いていくところで終わるわけですが、うまくいってれば読者も“生きよう”という気力になってくれるだろうと思っています」

ライフワークともいえる宗教小説を数多く手がけ、仏教やキリスト教のレクチャー本も発表している三田さん。自身の宗教観はどのようなのだろうか。

「自分の宗教はないんです。ただ人間に



『空海』(作品社)  
不世出の天才といわれる空海の全貌を描いた本格歴史小説。仏教本を手がけるきっかけに

『いちご同盟』(河出書房新社)  
いちご世代の繊細な心の裏をリリカルに描いた、恋と友情の純愛物語。課題図書選定作品

興味があるんですね。空海や日蓮の作品がありますけど、書いている時は自分が空海や日蓮になってるんです(笑)。初めてキリストを題材にしたのは『地に火を放つ者』だし、仏教ものの始まりは『空海』なので節目の作品ですね。『空海』は自分でも面白い本だなと思っています」

小説とは頭で作る。思考実験“

これまでに出版された小説は約50冊、レクチャー本などその他のジャンルも含めるとその数は約100冊にのぼり、毎年コンスタントに新作を発表している。

「小説というのは、思考実験。例えば物理学や化学では実験をやって結果が出て新しい原理を発見できるわけですが、思考実験は想像力の実験。頭の中で手順を踏んで、自分がその場に立ってみることが大切なんです。自分の想像力を駆使して“こうなるだろう”という過程をリアルに作っていくと、読む人も“そういうことがあるかもしれない”と思うぐらいの流れを作ることができるんです。私自身書き終えた後に“そうだったんだ”

と思えるような作品を書けば、読者も流れに乗って同じような体験をしていただけるんじゃないかと考えています。

頭の中で構成するので、あまり資料を入れすぎると資料に負けてしまうんですね。自分が面白いと思ったところだけ頭に入れて、あとはフィクションを書くようなつもりでやっています。一回限りの人生ですけど、小説書いているといろんな人生を体験できるんですね。読者にもそれを体験してもらったら面白いんじゃないかなと思います。だから私の書くものは全部、昔の青春をつどつた青春小説です（笑）。

結果的に偉い人の話の方が面白いので偉人伝みたいなことになるんですけど、どんな偉人も子供の頃は普通の人。周りの人から“あいつは変な奴だ”って言われながら試行錯誤して頑張って、歴史に

名を残す人になったわけですから。そういう人の青春時代を見つめれば面白いのではないかなと思いますね」

### 現在の活動と今後書きたい作品

現在は日本文藝家協会副理事長を務めるほか、著作権問題を考える創作者団体協議会理事長や著作権情報センター理事などを兼任し、著作権問題に取り組んでいる。

「いろいろ思いつくことがあるんですけど。今は電子書籍の問題があるので、国会図書館の蔵書を全部デジタルカメラで撮って、ネットでいつでも読めるようにする計画に取り組んでいます。国会図書館へ行けば無料で読めるわけですが、ユーザーの平均的な往復の交通費ぐらいで一冊読めるようになれば、利用者はあると思います。

パソコンひとつで大抵の用が足りると人間はそれしかやらなくなる恐れがあるから、そこで本を読めるようにしておけばみんな本を読むだろうと思うんですね。これに乗り遅れると、本は衰退してしまう。携帯小説にしても携帯では無料で読めるけど、“いい本は紙で持っていたい”という読者からの要望があるので、本にすればベストセラーになるわけです。だからデジタル化によって紙の本がなくな

るかといったら、そうじゃないんですね。今後もいい本は紙で残っていくはずなんです」

あくまでも自然体で、思いついたこと、やりたいことを実行に移すのが三田さんの生き方だ。今後の展開についてきいてみた。

「一昨年還暦になった時、これからは児童文学をちゃんとやろうと考えたんです。宮沢賢治先生を読むことによって自分が始まったから、恩返しですね。一番新しい『青い目の王子』は児童文学ですけど、これも土台は仏教です。それと出発点のもうひとつはドフトエフスキーなので、ドフトエフスキー論をやろうと。今は『白痴』を新しい解釈で書いています。原点を別の角度から見ることによって読み解くといえますかね。今後は児童文学とドフトエフスキーが二本柱になっていくだろうと思います。この先も、やりたいことだけを書きおろしてやっていきたいですね」



『青い目の王子』（講談社）  
仏教説話をちりばめたオリジナル作品。  
冒険あり、恋愛あり、悲劇ありの波乱万丈の物語